

情景画の叙述課題における健常者の談話産生 — 「説明」か「物語」かの教示の違いによる影響 —

本多 留美 綿森 淑子

広島県立保健福祉短期大学言語聴覚療法学科

抄録

健常者に対し、2種の異なる教示を与えて、情景画の叙述課題を施行し、教示の違いが得られる談話にもたらす影響について検討した。すなわち、健常者19名を2群に分け、一方には「説明をして下さい」という教示を、もう一方には「物語を話して下さい」という教示を与えた。情景画の叙述課題は2題用意し、各被験者が2つの課題を異なる教示下で行うよう組み合わせた。得られた談話は、1) 発話量、2) 発話のよどみ、3) 情報内容の性質の観点から分析を行った。その結果として、1) 発話量および2) 発話のよどみの出現については、教示の違いは明らかな影響を及ぼさなかったが、3) 談話において表出された情報が客観的か推測を含んでいるかについては、刺激となる情景画によっては、「物語」の教示下で推測を含む情報が多くなる傾向がみられた。

キーワード：健常者、談話産生、物語、説明、情景画

はじめに

言語障害の研究と治療においては、従来より、音韻、意味、統語などの各側面の能力を個別の課題において評価することに重点がおかれてきた。しかし、現実のコミュニケーション場面においてはこれらの個々の能力のみならず、談話レベルでの情報伝達能力が問われる場合が多く、また、談話の能力は必ずしも語彙や文法といった狭い意味での言語の個々の側面の能力と並行するとは限らず、文法的に正しい文が必ずしも適切な談話を成立させるわけではない¹⁾ことから、談話の評価を行う必要性が注目されるようになった。これまでに、失語症患者、頭部外傷患者、痴呆患者といったコミュニケーション障害を持つ人々の談話能力が検討されて来ている。しかし、一口に談話の評価と言っても、会話、物語、説明等、談話の種類は多様である。さらにどのような刺激を用いて談話を表出させるのかといった点についても、様々な方法が考えられる。このような状況の中で、臨床上、目的に合った談話課題を開発し、使用できるようにするためには、課題の差異が産生される談話に及ぼす影響についての検討が必要である。

脳損傷者を対象とした談話研究の中で、課題による結果の違いに言及したものとしては、MentisとPrutting²⁾が「物語」と「会話」ではcohesion analysisによる結果が異なることを示した。また、Braenneise-Sarshadら³⁾は、被験者と検査者との知識の共有の有無により、発話の長さや情報量が変化することを示した。Shaddenら⁴⁾は、脳損傷者のみならず健常者をも対象とした検討を行い、課題となる刺激の複雑さの違い、記憶能力、談話の構成能力など施行される談話課題の遂行に必要なとされる認知能力の違い、また、物語的談話か手続的談話かといった談話のタイプの違い等により、分析の結果が異なることを示した。このように、談話の種類、課題、課題場面設定の違いにより、結果に差異が生ずることは明らかにされてきているが、それぞれの談話課題の持つ特徴を明らかにするためには、健常者を対象とし、より細かな検討を行うことがさらに必要であると考えられる。

従来の談話研究においても、また、標準化された言語機能検査バッテリーの一部としても、情景画の叙述課題はしばしば用いられてきた。そこで、本研究では情景画の叙述課題に絞り、同一の情景画を提示した場合に、与える教示の違いによって、健常者が産生する談話に違いが生ずるか否か、違いが生ずるとすれば、どのような点であるかを検討した。

方法

1. 対象

被験者はボランティアとして本検査に参加した健常者19名である。男性は4名、他の15名は女性、年齢は24歳から74歳であった。スクリーニング検査において、言語障害が認められた被験者はいなかった。対象者をランダムにA、Bの二群に分けた。群ごとの性別と年齢は表1の通りである。

表1 被験者の性別と年齢

	A群 (N=10)	B群 (N=9)
性別 (M:F)	1:9	3:6
年齢	平均	42.1
	SD	17.2
	範囲	25~62

2. 課題

刺激となる情景画として、(a)「池」、(b)「雷雨」の2枚を使用した(図1、図2)。



図1 情景画(a)「池」



図2 情景画(b)「雷雨」

これらの絵は、対象者個人の特殊な経験や心理状態の影響を比較的受けにくく、具体的でわかりやすいこと、また同時に、絵に明らかに描かれている事柄のみならず、絵から自然に推測できる情報も含み、描かれている場面の前後の時間的経過に伴う物語の展開が比較的容易である、という基準で選定された。余分な情報を減らす目的で、白黒写真に撮り直し、B4判程度の大きさに引き伸ばして刺激として用いた。そして、(a)、(b)それぞれの情景画について、絵の説明をする課題と、絵から物語を作って話す課題を施行した。

3. 手続き

手続きとしては、まず、A群の被験者に対し情景画(a)「池」の情景画を提示し、この情景画の説明を求めた。具体的には、「この絵の説明をしてください。どのような人がいて、何をしていますか。この絵を見ていない人に大体のイメージを伝えるつもりで説明してください。この絵からだけでは、はっきり分からない部分も想像して話してください。かまいません。」という教示を与えた。引き続き、同じA群の被験者に対し、情景画(b)「雷雨」を提示し、この情景画について物語を話すよう求めた。具体的には、「今度は、この絵について一つの物語を作ってください。この絵に書かれている場面の前にはどんなことがあったのか、また、このあとどうなるのかを想像して一つのストーリーにしてください。難しく考えなくて結構です。あらすじだけの簡単な物語でかまいません。」という教示を与えた。一方、B群の被験者に対しては、A群の被験者に対して行ったやり方とは逆に、まず、情景画(b)「雷雨」を提示し説明を求め、次に、情景画(a)「池」を提示し、物語を話すよう求めた。いずれにおいても、課題の理解が困難だったり、問われたりした場合は繰り返し教示を行った。被験者が考えている間は、せかさずにできるだけ待つように、しかし、あまり考え込んでいるような場合には、「難しく考えなくて結構ですよ」「思い付いたことをお話しして下さい」などの中立的な言葉で促した。また、発

話が途切れても明確な終了の意思表示のない場合には、被験者に確認を求めた後、終了とした。課題場面はオーディオテープおよびビデオテープにて記録した。

4. 分析方法

被験者の発話サンプルを主にオーディオテープを聞きながら書き起こした。1つの発話を2名の聴取者が個別に書き起こし、2者の不一致部分については第三者が修正を加えた。このように記録した談話を用い、発話量、発話のよどみ、情報内容の性質について以下の項目を検討した。

(1) 発話量

i) 総単位数：発話の量的な指標としては、情報を担う最小の単位を基準とするために、1個の自立語とそれにつくすべての付属語をまとめたものを1単位として、各発話に含まれる単位数を数えた。すなわち、ここで用いた単位は橋本文法による「文節」におおよそ該当する。必ずしも明確な自立語を形成していない発話のよどみの部分に関しては、発音上に見られた区切りを1単位として扱った。ただし、語頭音の繰り返しであることがわかる場合には、標的語の単位に含めた。

ii) 情報単位数：発話の全体量から、正確な情報を担う部分のみを抽出し、また、自発的な言い換えなどによる同一内容の繰り返しといった冗長性を削除した後の単位数を情報単位数とした。すなわち、実質的に正確な情報内容を担っている発話量の指標である。Nicholas と Brookshire⁵⁾による「正確な情報単位」(CIU: Correct Information Units)の認定とカウントのための規則に準拠した手続きを経て、これに該当する単位数を数えた。結果的には、各被験者の発話の総単位数から、下記に示す「2発話のよどみ」部分と、内容の面から重複する部分を削除した後の単位数となった。

(2) 発話のよどみ

i) 挿入語句：文脈上、意味的に不要な語、句が挿入された部分をチェックし、その単位数を数えた。主として、間投詞(あの一、えーと、まあ、はい、ええ等)、意味的に空虚な挿入句(何か一、そうですね、等)、および発話の間を埋めるために用いられる音節の引き延ばし(えー、あー、んー等)から成る。

ii) 繰り返し及び言い直し：音節や語句の反復、および言い誤りや内容・表現の変更のための自己修正が観察された回数を数えた。

iii) 休止：5秒以上に及ぶ発声、発話の停止が見られた箇所を数えた。

iv) 質問及びコメント：課題において要求されている内容の表出には直接関係のない発話として、課題に関する質問(「思ったとおりでいいんで

すか？」等), 課題や情景画絵に関するコメント(「難しいですね」「暗いイメージがするんですよ」等), 自分の発話に関するコメント(「これではだめですね」等), 言葉を思い出したり, 内容を考えたりする際に表出されたと考えられる独り言様の表現(「どっちが先かな」「どういう風にお話したらいいんだろう」等)の単位数を数えた。

(3) 情報内容の性質

談話として表出された情報の内容について, 絵から直接的に述べることができる客観的情報と話者の推測を含んだ情報とに分類した。各被験者の発話それぞれに, 客観的情報および推測を含んだ情報がいくつずつ含まれているかを調べた。

i) 客観的情報: 刺激となる情景画に描かれている事柄を判断を交えずにできる限り中立的に単純な叙述で表し, これを客観的情報の基準とした。表 2 に情景画(a)「池」についての客観的情報の例を示した。基準となる情報のそれぞれを, 登場人物に関するもの, 背景に関するもの, 人物の動作や状態に関するものに分類して記した。各被験者の発話について, こうした客観的情報がいくつ表出されているかを数えた。

ii) 推測を含む情報: 刺激となる情景画に直接的には描かれていないが, 話者の推察や想像に基づいて表出されたと考えられる情報を最も単純な叙述の形で各被験者の談話から取り出し, その数を数えた。情景画(a)に関する推測を含む情報の例をいくつか表 2 に示した。また, 取り出した情報のそれぞれを, 登場人物に関するもの, 背景に関するもの, 動作や状態に関するものに分類した。

結果

1. 発話量

表 3 には, 総単位数と情報単位数を教示別に示した。どちらの教示条件においても, 被験者間で大きな差があり, 教示条件による特定の傾向は認められなかった。マン・ホイットニーの検定を行ったが, 総単位数, 情報単位数ともに教示の違いによる有意差は認められなかった。また, 教示条件に関わらず, 被験者ごとの情景画(a)に対する発話量と情景画(b)に対する発話量との関係を見た場合に, 総単位数の相関係数は $r=0.606$, 情報単位数の相関係数は $r=0.568$ であった。それぞれ, 危険率 1%水準, および 5%水準で有意な相関を認めた。

2. 発話のよどみ

表 4 は, 「挿入語句」, 「繰り返し及び言い直し」, 「休止」, 「質問及びコメント」をカウントした結果を教示条件別に示した。平均値で見た場合, 情景画(a), (b)ともに, 「説明」よりも「物語」教示下で, 「繰り返し及び言い直し」, 「休止」, 「質問及びコメント」の出現が多かったが, マン・ホイットニーの検定を行った結果ではどの項目についても, 教示の違いによる差は認めなかった。「休止」と「質問及びコメント」では, 出現の見られなかった被験者も多かった。そこで, これらの項目については, 各教示の下で何人の被験者に観察されたかを検討した。情景画(a)「池」においては, 「説明」教示下では被験者 10 名中 2 名に「休止」が, 2 名に「質問及びコメント」が見られ, 「物語」教示下では 9 名中

表 2 情景画(a)「池」に関する客観的情報および推測を含む情報の例

	客観的情報	推測を含む情報
登場人物に関する情報	男の子 (がいる) 女の子 (がいる) 犬 (が一緒にいる)	(男の子は) 兄 (である) (女の子は) 妹 (である) (犬は) ポチ (という)
背景に関する情報	草が生えている 池がある 睡蓮 (水草) が浮かぶ	夏休みである 春の雰囲気である 暑い日である
人物に関わる動作や状態に関する情報	池の中を見る, 覗く 男の子は網を持っている 女の子はバケツを持っている (子供たちの) 姿が水に映る	魚を捕ろうとしている 二人は話しをしている バケツに魚が入っている 兄妹仲良くしている

表3 「説明」教示を与えられた被験者と「物語」教示を与えられた被験者の
情景画(a)「池」及び情景画(b)「雷雨」に対する発話量

		「説明」教示下	「物語」教示下
情景画 (a) 「池」		(A群)	(B群)
平均		59.6	47.8
SD		45.6	16.0
範囲		9~165	27~76
情報単位数			
平均		39.9	29.6
SD		32.4	13.7
範囲		8~119	16~53
情景画 (b) 「雷雨」		(B群)	(A群)
平均		32.7	50.1
SD		17.1	24.7
範囲		14~62	21~87
情報単位数			
平均		23.1	31.4
SD		12.3	13.7
範囲		8~40	15~53

5名に「休止」が、5名に「質問及びコメント」が出現した。情景画(b)「雷雨」においては、「説明」教示下では被験者9名中3名に、「物語」教示下では被験者10名中5名に「休止」が出現した。「質問及びコメント」は「説明」教示下ではみられず、「物語」教示下では4名に見られた。

3. 情報内容の性質

表5には、客観的情報と推察を含む情報の出現数を教示の違い別に示した。平均値で見ると、情景画(a),(b)ともに、「物語」教示下では推察を含む情報が「説明」教示下よりも多く出現したが、マン・ホイットニーの検定では、情景画(b)「雷雨」による推察を含む情報においてのみ、1%水準で有意差が認められ、物語を話すという教示を与えた場合の方が推察を含む情報数が多かった。

考察

1. 発話量

本研究の結果では、教示の違いが発話量に及ぼす影響は、認められなかった。情景画(a),(b)どちらにおいても、また、「説明」と「物語」のどちらの教示においても被験者間の差が大きかった。2つの情景画を用いたが、情景画(a),(b)の間にも発話量の差は特に認められなかった。しかし、Brenneise-Sarshadら³⁾が失語症者と非脳損傷者とを対象に13枚からなる2種類の続き絵を用いて物語的談話の産生を検討した結果では、非脳損傷者においては、課題によって語数および正確な情報単位数に差が生じた。そこで、刺激となる情景画が同じであれば、教示が物語か説明かという違いがあっても発話量に差は生じなかったが、使用する情景画によっては、発話量に差が生じた

可能性も考えられる。さらに、教示の違いとは関わりなく、情景画(a)に対する発話量と情景画(b)に対する発話量との関係では、相関を認めた。すなわち、情景画(a)に対して発話量の多かった被験者は情景画(b)に対す発話量も多かったという傾向があったと言えよう。本研究では、二つの情景画に対する発話量だけしか検討されていないが、このことから、発話量の多い少ないは、教示や課題の違いに左右されるというより、むしろ被験者個人の持つある程度一貫した傾向とみることも可能かと考えられた。この点については、特定の被験者に様々な談話課題を行った結果を比較し、今後、検討を重ねてゆきたい。

2. 発話のよどみ

本研究の結果では、教示の違いが、発話のよどみの出現に影響を与えるということは、明らかにならなかった。挿入語句について、教示の違いに関わらず、情景画(a)に対する発話での出現量と情景画(b)に対する発話での出現量との関係を見ると相関がみとめられた。すなわち、情景画(a)に対する発話で多くの挿入語句の見られた被験者は、情景画(b)に対する発話でも同様であった。また、統計的には有意なものではなかったが、本研究で用いたどちらの情景画においても、「説明」教示下よりも「物語」教示下において休止や質問及びコメントの出現が多かった。出現数の平均値を見た場合も、出現の見られた被験者の数の点からも、同じ傾向であった。このことは、「物語を話して下さい」という教示を与えられると、当惑したり、考え込んでしまう場合が比較的多いことを表していると考えられた。

表4 「説明」教示を与えられた被験者と「物語」教示を与えられた被験者の
情景画(a)「池」及び情景画(b)「雷雨」に対する発話中に見られたよどみの出現数

		「説明」教示下	「物語」教示下
情景画 (a) 「池」		(A群)	(B群)
挿入語句	平均	7.7	7.6
	SD	9.3	5.1
	範囲	0~31	1~18
繰り返し及び 言い直し	平均	1.7	2.6
	SD	1.3	2.1
	範囲	0~4	0~6
休 止	平均	0.3	1.9
	SD	0.7	2.4
	範囲	0~2	0~7
質問及び コメント	平均	2.0	4.1
	SD	4.4	6.4
	範囲	0~13	0~20
情景画 (b) 「雷雨」		(B群)	(A群)
挿入語句	平均	3.7	6.7
	SD	2.8	5.3
	範囲	0~8	1~18
繰り返し及び 言い直し	平均	0.8	1.6
	SD	1.4	2.5
	範囲	0~4	0~8
休 止	平均	0.3	0.8
	SD	0.5	0.9
	範囲	0~1	0~2
質問及び コメント	平均	0.3	4.1
	SD	1.0	7.1
	範囲	0~3	0~21

表5 「説明」教示を与えられた被験者と「物語」教示を与えられた被験者の
情景画(a)「池」及び情景画(b)「雷雨」に対する発話中にみられた客観的情報と推測を含む情報

		「説明」教示下	「物語」教示下
情景画(a)「池」		(A群)	(B群)
客観的情報	平均	9.8	4.2
	SD	7.1	2.9
	範囲	4~26	0~9
推測を含む情報	平均	4.6	7.3
	SD	3.4	3.3
	範囲	0~9	2~13
情景画(b)「雷雨」		(B群)	(A群)
客観的情報	平均	6.4	4.3
	SD	2.8	2.1
	範囲	2~11	2~8
推測を含む情報**	平均	3.4	6.2
	SD	1.2	1.5
	範囲	1~5	4~8

** p < .01

3. 情報内容の性質

客観的情報と推察を含む情報量を検討した結果では、教示の違いによる有意差が検出されたのは、情景画(b)の推察を含む情報に関してのみであった。ただし、平均値を見ると情景画(a), (b)ともに、客観的情報は「説明」教示下の方が、推測を含む情報は「物語」教示下の方が多く表出されていた。本研究では、説明を求める教示においても「描かれていないことも想像して」と促しているが、それほど意識的になされたわけではなく、物語を話す場合にはより意識的に想像力を働かせる必要があった結果であろう。

Beeson ら⁶⁾は中度及び軽度アルツハイマー患者、失語症者、健常者を対象に情景画の叙述課題を施行し、推測による情報を得点化し、評価を行った結果、推測による情報は中度のアルツハイマー患者においてもっとも少なく、また、この得点はMMS得点と強い相関があったと報告している。「推測による情報」は全般的な認知機能との関連がより深いことがうかがわれることから、目的によっては、想像や推測を促すような教示を用いることに意味があるかも知れない。

以上のことから、情景画の叙述課題として、同じ情景画を提示した場合であれば、得られる談話の量的な面からは、教示の違いはあまり影響を及ぼさないと考えられた。また、本研究では質的な面の検討は未だ十分ではないが、刺激となる情景画に描かれた客観的な情報が多いか、それとも話者の推測による情報が多いかといった、談話の内容には教示の違いがある程度の影響を及ぼす可能性が考えられた。ただし、本研究では被験者の年齢が20代~70代と非常に幅広かった。佐久間と笹沼⁷⁾が、大学生と50~80代の健康成人に対し行った情景画の叙述課題において、表出される情報量の年代差が顕著であったこと、また、推測情報の数は加齢とともに叙述されなくなることを報告している。これらを考慮すると、特定の年齢層ごとに検討した場合には、異なる結果が得られた可能性もある。

今後の課題として、質的な面、とくに「物語らしさ」に関わる要因を検討する必要があるろう。「説明」か「物語」かの教示にかかわらず、「物語らしく」話す被験者が見られたが、こうした話者の談話の特徴を十分に抽出するには本研究で行ったものに加えて別の分析手法が必要と思われる。

まとめ

- 1) 情景画の叙述課題において、「説明をして下さい」という教示と「物語をお話して下さい」という2種類の教示を行い、こうした教示の違いが健常者の談話産生に与える影響を検討した。

- 2) 発話量および発話のよどみの出現には、明らかな影響が認められなかった。
- 3) 談話において表出された情報が客観的か推測を含んでいるかについては、刺激となる絵によっては、「物語」の教示下では推測を含む情報が多くなる傾向がみられた。

付記

本研究の一部は、文部省科学研究費一般研究(C) 08837023の補助を受けて行ったものである。

文献

- 1) Ulatowska, H. K. and Chapman, S. B. Discourse macrostructure in aphasia. Bloom, R. L., Obler, L. K. et al. eds., Discourse Analysis and Applications: Studies in Adult Clinical Populations. Hillsdale, Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 29-46, 1994
- 2) Mentis, M. and Prutting, C. A. Cohesion in the discourse of normal and head-injured adults. Journal of Speech and Hearing Research, 30: 88-98, 1987
- 3) Brenneise-Sarshad, R., Nicholas, L. E. et al. Effects of apparent listener knowledge and picture stimuli on aphasic and non-brain-damaged speakers' narrative discourse. Journal of Speech and Hearing Research, 34:168-176, 1991
- 4) Shadden, B. B., Birmette, R. B. et al. All discourse tasks are not created equal. Prescott ed., Clinical Aphasiology 20, Austin, Pro-Ed, 327-341, 1991
- 5) Nicholas, L. E. and Brookshire, R. H. A system for quantifying the informativeness and efficiency of the connected speech of adults with aphasia. Journal of Speech and Hearing Research, 36: 338-350, 1993
- 6) Beeson, P. M., Bayles, K. A. et al. Oral discourse in demented, aphasic and elderly individuals: Content analysis. Paper presented at the 1987 annual convention of the ASHA, New Orleans, 1987
- 7) 佐久間尚子, 笹沼澄子. 情景画の叙述能力における年齢差の検討. 老年社会科学, 12: 127-146, 1990

Discourse production in normal adults:
Effects of instruction differences on discourse production

Rumi HONDA, Toshiko WATAMORI

Department of Communication Disorders, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare

Abstract

In order to better understand the influence of task differences on discourse production in normal adults, picture description tasks were administered under two instruction conditions: "explanatory" and "narrative". Under the "explanatory" instruction condition, subjects were shown one of two pictures and asked to explain the picture to an imaginary listener. In the "narrative" instruction condition, subjects were shown the other picture and asked to make up a story inspired by the picture. The subjects were 19 normal adults, aged between 24 and 74. The elicited discourse was analyzed in terms of 1) the number of words and correct information units, 2) disfluency and 3) the quality of the produced discourse, evaluated by the concrete/inferential aspects. There were no significant differences between the different instruction conditions in the number of words and correct information units or in disfluency. As for the quality of produced discourse, the type of stimulus picture showed a different effect for each instruction condition; the subjects produced significantly more inferential statements with one of the stimulus pictures under the "narrative" instruction condition than under the "explanatory" one.

Key words : normal adults, discourse production, story, explanation, picture description